



SRI SATHYA SAI RAM NEWS

LOVE ALL SERVE ALL HELP EVER HURT NEVER

No.224_225 / 新春合併号 / 2024

スタディーサークル 全文版

2022年4月7日（木）のオンラインスタディーサークルはプレーマヴァーヒニー第55節、第67節「神に献身しながらあらゆる活動に取り組みなさい」、「ブラフマン瞑想を行う昔の聖賢たちを模範としなさい」について43名の参加のもと意見交換しました。

もし解脱が最終的な目的であれば、なぜ苦行をする代わりに様々な職業に就くのでしょうか？神聖な想いという燃料が欠けている理由はなぜでしょうか？「一人離れた場所でひたすら神の瞑想に勤しむ偉大なる魂の数が減ると、世界はより多くの苦しみに襲われます」と第67節にあります。偉大な魂の減少はどのように世界の苦しみにつながるのでしょうか？などについて話し合いました。

参加者の皆さんからは、「様々な職業に就いて、それを実行していくのも苦行だと思う。様々な人間関係などに悩みながら。そこに何かあると、スワミ*1という神に祈りながら、その中で成長していける。まさに苦行であると思う。」、「大きな意味では生きていくためだと思うが、生きていくためにお金が必要になったり、社会の営みの中で職業に就くということが必要になったりすると思う。その根本的な目的が何かという目的意識が人それぞれ違うような気がする。」、「神聖な思いというのは、やはり神への想い。それをハートに据えてこそ愛がどんどん広がっていくことになると思う。そうすると愛のエネルギーがあふれてきて、ずっとそれが消えることがなくなっていくと思う。私たちは子供の頃から学校に通って育っていくが、そういう根本的な教え、神の教えとか、正しい教えを、教えてくれる所が本当に少ない。私も学校でそういうことを習ってこなかった。自然にそういう方向に皆が行けたらいいが、やはり世の中には外向きになるようないろいろな情報が多い。そういうものに目を取られてしまって、その大事な部分を忘れてしまって、子供のうちからそれを育てていくこともできず、大人になってからそういうものに出会うこともできず、皆がそうなれるものではない。やはり神聖な繋がりをもてるように正しく導いてくれる教師がいてくれたら良いと思う。学校でも根本的な、ババが教えてくれているようなことが教えられる状態になると良いと思う。忍耐とか、無私の行為を行うなど。実際にどこを見て、どのように進んで行ったら良いのかが欠けてしまっていると思う。」、「テレビを見れば、テレビドラマで社長さんが大きな椅子に座って、脇には美人の秘書がいるとか、そういうものを追いつめるのが良しとされる世の中。食べ物にしても、私たちは食べる前にフードマントラをしており、食事もヤグニヤ（供犠）だと教わった。そのように一つひとつの行為を神聖なものにしていく思いが欠けていることが原因かと思った。」、「昨日、世界のお金持ちランキングというものを見た。上位の人たちの個人所得が何十兆円などと書いてあったが、そんな大金は一生かかっても使いきれないだろうが、さらに蓄えよう、もっと稼ごうとしているようで、そんなに稼いでどうするのだろうと思った。そのように皆が欲望に際限を設けていない。昔は世界がシンプルで霊性修行がしやすい環境だったと思うが、どんどん欲望が広がってそこから世界の苦しみが生まれていると思った。」、「私の想像だが、そういう偉大な魂の方々は、その方々の周りのすべてが浄化されているような気がした。空気や五大元素が浄化され、そこから良い波動が広まって、地球に影響しているような気がする。一人の偉大な魂の祈りはとても大きな影響を与えていると思う。」などのコメントの共有がありました。

サイの学生の皆さんからは、「サナータナ ダルマ*2では人間の人生を年齢に応じて4つの時期に分類する。一つ目は学生期、その後に家長期が続く。その後は老年期。最後はサンニャースィン*3としての世を捨てた者の時期。その4つの段階がそれぞれの時期に果たすべき役割に相当している。誰もが4つの時期を通ることが想定されている。ごく一部の人は学生期の段階を経ずに、突然最後の段階に行くような人がいて、そういう人の人生は非常に禁欲的な人生であると言われている。もし特別な道を行かないのなら、基本的にすべての人が最初に勉強して知識を蓄え、その後で家長となって家庭をもつ時期を通り抜けていくと想定されている。特に家長期の段階では自分の家庭を守るためにお金を稼いだり、あらゆる義務を果たす段階とされている。家長期でいる間も最終的なゴールにたどり着くための努力を同時に続けていくべきであるとされている。したがって一つひとつの段階というものが最終的なゴールにたどり着くための道具になっている。これがどういうことを意味しているかということ、どのような活動も神聖な活動として昇華されなければならないということ。ギターヴァーヒニー（ヴァーヒニシリーズ*4の1冊）の中でスワミがおっしゃっていることだが、その一つの方法は、私たちが何を行うときにおいてもスワミ、神様が私たちのことを見ていらっしゃると思って、その義務を果たすことであるといわれている。そのように考えることが、神様が常に私たちと共にいると思いを与えてくれる。このように、神が私たちと共にいると考えていくことは、すべての中に神がいるように、すべての人を見ていくということに繋がっていく。すなわち、すべての人の中に神を見ることができるといえる段階にたどり着いて初めて、世を放棄した人のようなステージにたどり着くことができるということの意味していると思う。最初の学生期や家長期のステージを通して平静さを学んだり、あるいは二重性を見ないということ学ぶことになっている。たとえ最終的なゴールが解脱だったとしても、その前の段階で行っていく一つひとつのことが、そこに至るための試金石になっている。であればこそ、その以前の段階においても私たちの職業的なことを献身的に行っていく必要があるということだと思う。」、「私たちがいろいろな職業に就いているのは、五大価値（真理、正義、平安、愛、非暴力）について学ぶこと。いろいろな職業をとおして、日々の生活の中で最終的に解脱を得るために五大価値を実践していかなければならない。それは賢者だけではなく、すべての人に当てはまる。例えば賢者は自分の弟子たちと一緒に五大価値を共に実践し、最終的に解脱などにたどり着く。よくスワミが教育の目的は生計を立てるためではなく、人生のためのものであるとおっしゃっている。それと同じでいろいろな仕事をしていくのも生計を立てるためではなく、最終的に解脱を得るためにそうしている。私たちの職業はそれぞれ違って、危険な仕事をしている人、普通の仕事をしている人、いろいろな人がいると思うが、そういったことを通して一人ひとりが同じ原理を見るようにしていけるように仕事をしている。これが自分の理解。」、「私たちが人生の主なゴールを忘れてしまったことが原因。私たちは、例えばキャリアのことや、

いろいろなことに重要性をたくさん置き過ぎている。そういった中で、何が本当に中心的な目標なのかを分からなくなってきた。人間は誰でも五つの神聖な特質をもっているはずだが、多くの人が例えば利己的なところ、いろいろな執着をもつと、私たちが元々もっている神聖な性質をどう生かすのかを分からなくなっている。多くの方々は、例えばオーガニゼーションに参加していない方でも、あるいはそういった組織に何も参加されていない方でも、非常に偉大な奉仕をしており、優れた魂の方も沢山いらっしゃる。私たち自身の神聖な特質を忘れてしまっている、私たちがもっているはずの神聖な特質をどう生かすかということだと思ふ。本当にいつも私たちの中には良い思いや悪い思いの間の葛藤がある。そこで少しの時間を取って、どちらの思いを自分が励まして伸ばしていかなければならないのかを考えることが大事になっている。私たちが良い思いを選ぶのか、悪い思いを選ぶのか自分の習慣になり、良い思いの方を自分が選択することを選ぶなら、それが習慣になる。いつも良い思いをもつようになり、神聖な思いをもつようになっていくとそれが習慣となり、悪い思いの方を選んでもそれが習慣になってしまう。」、「ここでスワミが述べていらっしゃるのが、放棄、平安、真理、慈悲深さ、忍耐、無私の奉仕。これらを燃料としていつもくべていなければならないとスワミがここでおっしゃっている。スワミがおっしゃっているのは、これらは元々の人間の性質であるということ。もし私たちがこれらの反対のこと、例えば嘘をついたり、人を傷つけたり、何か良くない話し方をしたり、そういったことをするとまったくこういふことに繋がっていかない。靈性修行をしていても、それは人によって本当に感じ方が違う。何も良いことをしていないので何かの罪悪感を感じていたり、あるいはそのようには感じない人など、いろいろな人がいる。何か良くないことを行ったときに罪悪感を感じるのは、それがまったく靈的な進歩に繋がらないことをしてしまっている、そのような罪悪感を感じるようになっていく。もし私たちが、靈的な向上に繋がるような活動により興味をもつのであれば、そういうことに繋がらない活動への興味はなくなっていく。スワミがおっしゃっているいろいろな特質というものは、私たちが常に神にいろいろなことを献身的に捧げているのであれば、すべては自然にやってくるような特質ばかり。もし燃料が足りなくなることがあるのであれば、それはスワミがよくおっしゃるようなパートタイムな帰依であるということになってしまう。そういった場合には望ましい結果にならないと思う。」、「実際にそういう偉大な魂は世界を守護するために必要とされていると思う。そしてそういう人々がさらに何人かの人々をゴールへと導いていくと思う。サナータナ ダルマにおいては、生徒と先生の関係においてサナータナ ダルマが守られなければならないといわれている。偉大なグル（靈性の導師）の皆さんがいて、彼らの知識や英知が子弟の関係において、体系的なやり方において先生の知識や英知が共有されることになる。そのように体系的に英知が人々に共有されていくことが、多くの人がダルマの道を歩んでいくことを非常に助けてくれると思う。そのようなグルの数が減っていくとそのような体系的な知識が次の世代へ引き継がれることが難しくなると思う。そのような問題が起きると、やはりダルマ（正義）が減衰して、人々の行いもアダルマ（不正義）なものに変わってしまっていて、それが苦しみにつながると思う。グルの数が減っていくとアヴァター（神の化身）が降臨して、再び偉大な人々が力を取り戻せるようにしてくださると思う。」、「偉大なグルであるマハープルシャと呼ばれる人々は、単に自分の問いの答えを得るためとかそれに対して瞑想しているのではなく、その人生において、完全に思いを世の中から切り離して瞑想している方々だと思ふ。例えばスワミがご講話でされた例え話がある。台所にお菓子が置いてあったとする。その状況でお菓子を食いたいと思ふなら、自分が今いる場所を離れてキッチンまで足を運んで食べなければならない。同じようにリシ（聖賢）と呼ばれる方々は、家長期として過ごしていた場所などを離れて木の下で瞑想したり、神の至福が味わえる場所へ行ってそうしている。彼らは自然と直接つながることができる人々だと思ふ。彼らのとてもシャープな瞑想の能力によって一つのものに一点集中することができる。そのような彼らの自然とつながる能力のために自然を理解することができ、彼らはどのようにも自然を傷つけることがない。それに対して私たちは自然が一体何を必要としているのかということをもっと感じるべきで、自然を癒すためにどうすればよいのかもわからずに自分たちのことを中心に考えている。これがそのような偉大な魂の数が減るとなぜ世の中に苦しみが増えるのかということの背景だと思ふ。」などのコメントの共有がありました。

また、サイ大学学生寮の配信動画よりカイケーイー*5とラーマ*6との間の知られざる会話に関するスワミの説明をご紹介します。

*1 スワミ：聖者などの尊称、ここではサイ・ババ様のこと。

*2 サナータナ ダルマ：古来永遠の法

*3 サンニャースィン：世捨て人、放棄者、隠遁者、隠者、苦行者、出家、出家行者、托鉢、生涯独身を貫く行者、遊行者、遊行期にあるブラフミン

*4 ヴァーヒニ シリーズ：インド発行の月刊誌、サナータナ サラティ誌にテルグ語と英訳で連載されたサティヤ サイババの著作。

*5 カイケーイー：ダシャラタ王の第三王妃。バラタの母親。

*6 ラーマ：トレーターユガにおける神の化身、美德と正しい行いにおける最高の模範。

2022年4月10日（日）のオンラインスタディーサークルは「『ラーマカター ラサ ヴァーヒニー』※1の意義」に関して29名の参加のもと意見交換しました。2014年のRadio Saiオーディオプログラムの一部をご紹介します。その後ミニ・スタディーサークルを行いました。

スワミ※2ご自身が書かれたラーマヤナ※3から何を得ようとフォーカスしたいか？善悪の様々な物語が混合したラーマヤナが私たちにとって甘露のようなジュースであるためには、どのような姿勢でこれを聴く必要があるか？などについて話し合いました。

参加者の皆さんからは、「この『ラーマ物語』を上中下と読んだ。裏話のような『ラーマ※4が怒ったふりをした』というような、あえて神の視点から見た表現がある。いろいろな喜怒哀楽、良いところ、悪いところなどいろいろあることが起こる。でも結局すべては芝居で、神のリーラー（奇跡的な御業）なのだ、所々で気づかせてくれる。そういったことが私には一番大きいと思った。」「同じように私も読んだ。物語に夢中になっていると、時々スワミが裏話を解説してくださるので『わあすごいな』と思う。全部スワミが脚本を書かれ、すべて劇の中で起こったこと。後書きにも書かれていたが、ラーヴァナ※5は一応悪役だが、本当は神と早く融合するために善人として7回生まれてくるよりもむしろ悪役として3回生まれてくることを選んだという、非常に帰依のある崇高な魂だったという話を聞いた。世の中に起こる出来事は、何がどうなっているか私の目からは分からないが、本当にすべては神のリーラーで愛の中の劇なのだと思う。」「ラーマヤナはハッピーエンドかと思ったら、ハッピーエンドではなく、最後は流れていく。この世的な幸せが最終的な目的というのではなく、本当に良いこともあり、悪いこともあり、それを乗り越えて、また元に戻ったり。そういう流れを教えてください。それを超越したような気持ちで読んでいくことが必要。それが甘露、甘いということなのかなと思った。」「質問とは答えが違うかもしれないが、一つひとつの場面で、とても、生き方が人間としてのダルマ（正しい行い）にかなっている。男の兄弟の愛情とか、夫と妻との夫婦の関係とか。特に私が好きなのは2つあるが、一つはラーマが戻ってきた時に、バラタ（ラーマの異母兄弟）がずっとラーマのことを想っていたために、どちらがラーマでどちらがバラタか分からないくらい、肌の色まで変わっていたということ。一生懸命御名を唱えて想うと肌の色も変わるくらい同じようになるという姿もとても感動的。また、ハヌマーン※6が純粋にラーマのことばかり考えていて、髪の毛一本一本から御名が聞こえて、もう最後にはラーマ自身がハヌマーンを抱きしめてくれるという場面は本当に憧れる最上の帰依の形だと思う。そのように物語の一つひとつの場面に大変な甘さがあると思うので、一個一個を深く味わいたいと思う。」などのコメントの共有がありました。

サイの学生の皆さんからは、「ラーマヤナに関しては本当にたくさんのバージョンがある。本当に当時生きていたヴァールミーキ※7や他のたくさんの賢者が書かれたバージョンがある。特にヴァールミーキはラーマ神の人間の側面に重きを置き、そこではすべての出来事においてラーマのことを人間として扱っている。でもトゥルシー（トゥルシーダース・ゴースワミー※8）のラーマヤナは帰依者と神との関係から書かれている。スワミの書かれたラーマヤナは神から見た視点で書かれている。なので、ラーマヤナに興味のある方は誰でも『ラーマカター ラサ ヴァーヒニー』を読むことによって、本当に全体的なものが見方が完結してすべてのレッスンを得ることができると思う。この『ラーマカター ラサ ヴァーヒニー』を読んだ自分の感想だが、何か学びを得るべきポイントが訪れたときには、その中で必ずスワミが学びを得るべき御教えを合わせて教えてください。そしてもう一つ恩寵深いポイントは、ヴァールミーキや他のバージョンでは議論されていない出来事も含めて取り込まれている。この『ラーマカター ラサ ヴァーヒニー』を読むことで、帰依の側面から楽しむことができるし、レッスンを得るといって側面からも両方から楽しむことができる。楽しんで学ぶことができるということ、帰依の側面から楽しめる、その両方にここでフォーカスできるということ。」「やはり興味深いことはいろいろなトラブルがたくさん起こるが、そんな中でもラーマが首尾一貫して善良さに固執されてきたこと。一つひとつの章のすべてに学ぶべき点が含まれている。また、ラーマヤナは同時にシーター※9の物語でもある。なのでラーマヤナはシーターの立場から読むこともできる。シーターの立場から読むと、シーターは本当に子供の頃から王宮に住んでいた。それが、結婚を経た後でまったく想像をしたことがないようないろいろ問題に直面することになった。どのようにシーターのように非常に強く人間性や謙虚さを様々な状況の中で維持できるのか、そのような側面を学ぶことができる。同時にこの物語を通してシーターが非常に人間としての素晴らしい例を示している。女性がいかにして幸せでまた強くいられるのかという例をシーターが示してくれている。なのでシーターはこの時どのように考えていたのだろうか、ラーマ中心の見方とは異なった見方で読んでみるのが違う楽しみ方になってくると思う。」「皆さんに、神聖なラーマ・ナヴァミ（ラーマ神のご降誕祭）の日をおめでとうございますと申し上げます。例えば、今日のBro. アラヴィンドのオーディオプログラムではスワミの例えがあった。オレンジの実の中にはいろいろな繊維質の物が入っているが、それを取り去ってジュースを得る話。それと同じように、物語の中にも良いもの・悪いものが両方含まれている。やはり悪いものとしてはカイケーイー※10が示した嫉妬や、ラーヴァナが示したエゴ。そういったものを繊維質と思って取り除くなど、そういう姿勢で学んでいけば良い。でも、ここで学べる非常に素晴らしい多くの良いことに比べれば、そこに混ざっている悪いことは着目するに値しないということだと思う。またラーマヤナというのは素晴らしい人間関係のためのガイドブックでもあると思う。この物語を通してスワミが示された理想の人間関係は、例えば理想の母と子供の関係であったり、理想の夫と妻の関係であったり、理想の兄弟、親戚関係であったり。それらの理想の人間関係をこの物語を通してスワミが教えてくださいと思う。そして同時に人間関係だけではなく、動物たちに対してさえもそうであったと今のBro. アラヴィンドのお話にもあった。例えばジャターユ※11との関係や、いろいろな動物たちとの関係、さらに動物だけではなくて石や物との関係においてさえもそうだった。そして、これらの悪いものを乗り越えた後で、初めて良い特質がやって来る。

私が祈りたいと思うのは、私たちがいかにして悪いことを克服して、良いものを得ることを学ぶことができるのかということ。その学びが得られるように祈りたい。」、「人間が体験していくことは、すべて悪いものと良いものが交互に続いていく。その繰り返しの中で、悪い出来事も良いことと同じぐらい私たちが学べるレッスンを含んでいる。もし私たちが幸せな体験だけを送っていたならば、悲しみが何を意味するのかも分からないまま。そして悪い出来事も良いことも同様にレッスンを与えてくれる。もし悪い出来事もすべて神様がそのように演技をされているということを理解しなければ、物語を楽しむことができなくなってしまうのではないかと思う。また、これらの物語を読むときに、本当にこれは普通の人間の身に起こっていることだと考えて、そのような観点でこれを捉えていくことができれば、これは神様なのだからという冷めた目で見ずに、そのレッスンが得られていくだろうと思う。」などのコメントの共有がありました。

- ※1 『ラーマカター ラサ ヴァーヒニー』：『ラーマ物語』 ラーマカター ラサ ヴァーヒニー ～ラーマヤナの甘露の流れ～ サティヤサイ出版協会
- ※2 スワミ：聖者などの尊称、ここではサイ・ババ様のこと。
- ※3 ラーマヤナ：ヴィシュヌ神の化身ラーマの物語。インドを代表する大叙事詩の一つ。
- ※4 ラーマ：トレーターユガにおける神の化身、美徳と正しい行いにおける最高の模範。
- ※5 ラーヴァナ：『ラーマヤナ』に出てくるランカーの羅刹（悪鬼）の王。
- ※6 ハヌマーン：『ラーマヤナ』に登場する猿。ラーマを深く信愛し献身をささげた。風の神の子で空が飛べたため、飛んで薬草をとりに行ったり、海の上を飛んでランカーを偵察に行ったりと、多大な貢献をした。
- ※7 ヴァールミーキ：ラーマの存命中に記されたインドの大叙事詩『ラーマヤナ』（ラーマの歩みという意味の神の化身ラーマの物語）の述者。
- ※8 トウルスィーダース・ゴースワミー：北インドの聖者。ラーマ神の偉大な帰依者にして大賢人。16世紀にラーマヤナをアワディー語で再編集した。
- ※9 シーター：トレーターユガの神の化身ラーマ王子の妃、妻としての理想のダルマを世に示した。
- ※10 カイケーイー：ダシャラタ王の第三王妃。バラタの母親。
- ※11 ジャターユ：『ラーマヤナ』に登場する年老いた禿鷲(はげわし)、ヴィシュヌ神の乗り物である聖鳥ガルダの子といわれる。ラーヴァナがシーターを連れ去ろうとしたとき、衰えた身であるにもかかわらずシーターを守ろうとして戦うが、ラーヴァナに倒された。ラーマはジャターユの頭を膝に載せ、自らの手で死に水を飲ませた。ジャターユはラーマの御名を口にしつつ息を引き取り、ラーマそのなきがら亡骸をとむら吊った。

2022年4月20日（水）のオンラインスタディーサークルでは、プレーマヴァーヒニー第72節、第73節「瞑想と唱名によって心を清めなさい」、「神の降臨を求めて祈りなさい」について38名の参加のもと意見交換しました。

日々の行動を行いながら、どのように「非行為者」でいることができるのか？「カースト*1も、僧侶の身分も、儀式も、経典を学ぶことによって得られた学識も、このアートマ（神我）の知識という悟りを得る基準にはなりません。揺るぎないブラフマン（宇宙の根本原理）瞑想だけが唯一の基準です」という御言葉をどのように理解するか？なぜ私たちは神の降臨を願い求めるべきなのか？などについて意見交換しました。

参加者の皆さんからは、「日々、実際に仕事をしたり食事をしたり、いろいろなことをしている。その中で自分をきちんと見るというか、俯瞰して見ているようなもう一人の大きな存在の自分に気づいていられるようになれば、非行為者になるのではないのかと思う。そのために、世俗の色に染まらずに崇高な御教えに従って生活することも大事。やはり離れた感覚をつかむために瞑想したり、神の御名を唱えたり、様々な靈性修行のやり方があると思うが、自分に合った靈性修行を見つけていくのも大事だと思う。」、「達観した感覚をもった世界的に偉大な音楽家の方は、『自分が演奏しながら、自分が演奏したのではない』とおっしゃっている。私も同感で、本当に神様と一つになってできた場合には無我の境地というか自分がなくなって、神様によって行為がなされているという感覚。そのような時に非行為者でいることができるのではないか。」、「神聖な思いで心を育もうと努力しない人のハートは、必ずや不正と邪悪の楽園となる。心を育む努力をしないといけない。それがブラフマン瞑想をすることになるのでは。そのための方向として御言葉を読むとか、バジャン（信愛の歌）、ヴェーダ*2とかいろいろなサーダナ（靈性修行）があると思う。」、「どのような身分であろうと、どのような宗教的儀式を行っても、どのような経典を学ぼうとも、瞑想でも、奉仕活動でも、バジャン、マントラ（真言）、ヴェーダでも外形的なこととして行為を見ると、私たちはいろいろなことをする。この御言葉に、最後に揺るぎないブラフマン瞑想だけが唯一の基準ですと書かれている。その意味はきっと、私たちの行為の動機に神が不在であれば意味がないことになるということではないか。反対に言うと、一番目の問いにも関係しているのかもしれないが、その神を意識して、神に喜んでいただき、神に満たされた心で行うことが、やはり大事になってくるのではないかと感じた。」、「一人ひとりの人生を考えると、神に守られてきていると感じる。しかし世界全体を見てみると、戦争が起こっている。世界の平和や平安について考える時、神の降臨というものが一番大きなものになるのではないかと思う。だから神の降臨を願うことは世界の平和のために必要だと思う。」、「私がこの質問を読んで思ったことは、例えばスワミ*3を知る前にも私なりに信仰はあったが、やはりスワミの肉体を見て、スワミの行動を見て、本当に神様というのはこういうものなのだという確信が得られた。スワミが直接書かれた本を読んでわかったことは全然違った。やはり肉体の神様が降臨して下さって知ることと、その前に知っていたことは全然違い、その差は大きいということ。もう一つは、私自身が肉体を去るときにスワミご自身が現れてくれたら、迎えにきてくれたらいいなという願い。その二つの意味を考えた。」などのコメントの共有がありました。

サイの学生の皆さんからは、「とても美しくバガヴァッドギター*4に書かれているが、クリシュナ神*5は二通りのヨーガ（神との合一のための行）を教えてください、それらはサンニャシヨーガとカルマヨーガ。バガヴァッドギターの5章に書かれている放棄のヨーガともう一つは行いを通じた道に関する。カルマサンニャシヨーガとは行いの結果を放棄するヨーガ。カルマヨーガは行為の道。クリシュナ神は、誰でも二つの道のいずれかを選ぶことができ、そのいずれも最終的には解脱のゴールにたどり着くと教えてください。カルマサンニャシヨーガ（行為の果実を放棄するヨーガ）はとても難しい。どうしても心の傾向にその難しさが起因している。この行為の結果の放棄のヨーガは解脱を得るための第一の道のりとしてはとても難しいもの。そのように行為の結果を放棄しようと思うと、まず最初に心を清めなければならない。それには帰依をもって仕事をすることをおして心を清める必要がある。そして行為の結果を放棄するヨーガをするためには、社会の中でルールの下で働くことをとおして心を清める必要がある。世の中の大半の人にとっては、帰依をもって仕事をしていくというアプローチが行いやすい道になっていると思う。行為の道（カルマヨーガ）を辿る方々にとっては、やはり世俗の仕事をすることによって同時に知性を磨いたりすることができるようになってきている。そしてすべての行為を神に捧げて、結果も預ける。沼に生えている蓮の葉が濡れないのと同じように、世俗で働いているヨーギもそのように罪に濡れることはないということ。しかし、そこで私たちはすべての結果を楽しもうとする行為者とならないように努めなければならない。無知でいる人々にとっては感覚の喜びを放棄することがとても難しく、みじめさに陥ってしまうことになっている。この世的な喜びを捨てることによって、非行為者の立場を得ることができる。神の御名を唱えることによって、神の至福を得ることができる。外側の楽しみを克服して、欲望や怒りを克服し、そのような道を辿ることができる。」、「私たちがエゴとかプライドを捨てて世俗に関わるときに、行為者意識を捨てることのできるのだと思う。同時に行動の結果に執着しないようにしながら。そして何をしようともそれを神に捧げようとする。私たちが自身が神の小さな一部分にすぎないのだと理解している必要がある。私たちが本来すべきことは、神の一部として神に奉仕すること。そして私たちは神への無私の奉仕者だと考えることだと思う。世俗的な行いをする時には、私たちが行為者であると考えないようにしなければならない。私たちがもっている心とか感覚、知性は非常に不活性なもので、あまり神様の意に沿うものではないから。本当に神様の助けがあってこそ、行為者意識を捨てることのできると思う。例えばキッチンでトングも、それを上手く使える人が使った時に非常に役立つものになる。例えば燃えている炭を持ち上げるような困難な仕事も、そのトングという道具を使えばうまくできる。でも手を使ってやったならば、燃えている炭を動かすことはできない。道具をうまく使うことができなければ、道具は不活性のままで、テーブルの上に置いてあるだけになってしまう。もし神様自身が私たちの身体や心、魂を使ってくださらないなら、私たちは何も行動することができない。だから、私たちがエゴや行為者意識を捨てて、神様

だけが私たちに行動する力をもたらしにくさると理解している必要がある。」、「マハーバーラタ*6から一つのお話がある。大変な苦行をした賢者がいたが、朝の修行の儀式をしていたら、空から鳥が何かを落としてきた。フンを落とされた賢者が非常に怒って、怒りの力でその鳥を灰に変えてしまった。一部始終を見ていた他の賢者が、鳥を燃やした賢者にアドバイスをし、別な修行をするように命じた。それは例えば、他の村々を回って、自分の持ち物は何も持たないで、必要とする物はそこで物乞いをしてもらうようにするなどの修行をすることになった。そして、ある時その村に行き、何かを恵んでもらえるように、ある家に行った。そうすると、施しをしてくださるはずだったご婦人が出てくるのがすごく遅く、再びその賢者がとても腹を立てた。ご婦人が言うには、『私のことはそのように見ないでください。私はあなたが燃やしてしまった鳥のようなものではありません』と言った。その賢者はとてもショックを受け、一体どうしてご婦人が鳥を灰にしてしまった出来事を知っているのだろうかと思った。そうすると、ご婦人が答えたのは、別に自分はそういう能力を得るために特段の苦行をしたのではなく、霊的な文献を学ぶということも一切していないけれども、ただ日々の家事を完全にしようとしてきただけで、そのようなことが分かるようになったとのことだった。その時賢者は赦しを請い、そのご婦人にダルマ*7（正義）について教えてくれるようお願いした。ご婦人は、彼にダルマについて教えることができる、もう一人の適任な者がいると言って、その人の名前を教えてくれた。その方、ダルマ・ヴァーダという人を探して会いに行った。ダルマ・ヴァーダという名前からするとすごく偉大な聖者なのだろうと思われたが、実際にそのダルマ・ヴァーダという人を探し当てて、その人のもとに着くと、実際にはその人は肉屋さんだった。そしてまたショックを受けた。その肉屋さんに次のように尋ねた。『どうしてあのご婦人がダルマについてあなたから学ぶように言っているのでしょうか？自分は本当にこれまで文献をたくさん学んできたのに、どうしてあなたのような肉を切って売っている者から、私がダルマについて学ばなければならないのでしょうか？』。そうすると肉屋さんは、『自分は別にダルマや、何かの文献については何も知らない。どうしてまた、そのご婦人があなたにそういうことを言ったかも分からない。自分には、どうして肉を売ることが罪であるのかも分からない。なぜなら自分にはそれ以外の知識がないからです。何であれ自分も持っているわずかな知識だけをもって、自分は両親に仕え、自分の家族に仕えているのです』と言った。そして『自分は何も動物に対して残酷なことをしたいとかいう意図は一切なく、その代わりにただ自分の家族に対する義務を果たしたいと考えているだけなのだ』ということだった。そして日々彼が行っているそのような行動はすべて神に捧げられているということだった。そのことを通してその賢者が悟ったことは、どれだけのことを知っているか、どれだけ物理的に神の近くに居るかということが全然大事なわけではなく、神のことを考えて黙想している時間の方が大事なことであるのだということ。そしてまた、肉屋さんもご婦人も、そのようにしながら、神の道から逸れるような悪いことを一切してこなかった。そういった点において、この鳥を燃やしてしまった賢者よりも優れた存在であるということが分かった。その一方で、この賢者には知識は沢山あったけれども、いつも怒りに苛まれていた。私たちがどんな仕事をしていようが、どんな状況にいようが決して神の道から逸れてはいけない、そのようなことをして私たちの霊的な進歩を無駄にしてはいけないと学んだということだった。」「このことから言えるのは、私たちがどれだけ霊的な実践（サーダナ）をしても、それを神に捧げなければ何の意味もないということ。そして、この世のなかの知識、あらゆることを知っていたとしても、それを実践しなかったら意味がない。例えば、試験のためにあらゆることを勉強しても、答案用紙にその答えをまったく書かなかったら、やはり試験に失敗する。であればこそ、私たちが実際にやっている仕事というものに、よりフォーカスすべきだと思う。そして日々毎日行っている私たちの行動に対して、より意識的であるべきだと思う。そしていつも、私たちのやっていることは、神への捧げ物なのだとすることを、思い出すようにしていくこと。そして私たちが何をしようとも、それは神への奉仕であり、それを神に捧げるべきであるということを知っていること。そして日々働いている時にも、神にフォーカスし続けることだと思う。」「そのような偉大な方が降臨することによって世界が維持されていると思う。そのような方がいらっしやなければ、世界は壊れてしまっていたと思う。これまで多くの僧侶や全世界のそのような方々が降臨を祈ってきたと思う。そしてそのような方が行ってきた祈りはすべての方の幸福に関するものであり、それはサマスタロー カースキノー バヴァントゥ（すべての世界が幸せでありますように）だった。これまでダルマの減衰が見られたとき、ネガティブなものが増えた時にはいつも神の降臨によって元の道に戻ることができた。バガヴァッドギーターの中でも、クリシュナ神はダルマが減退した時にはいつでも自分が人間の姿をとってもとの道へ彼らに戻すと語っていた。サイ・ババの降臨の場合にも、実際にスワミがお生まれになったタイミングも、世界の中で大変な困難があった時期だった。お生まれになったブッタパルティ*8も当時は非常にアダルマ（不正）な活動に満ちていた。本来そのような土地であったブッタパルティ全体を完全に変容させ、さらにその土地を誰もがそこに行きたいと思うような神聖な土地に変容させた。それが、神聖で偉大な魂が来られた時に、どのようなオーラをもって来られるかということではないかと思う。」「皆さんは、どのような時に神の降臨の必要性があるかということをよくご存じだと思う。世界のダルマが減退したときにはいつでもそこに再び人類の霊性を持ち上げるお方が、再びダルマを復興させるお方が来てくださらなければならない。そのような神聖な魂は邪悪な人々をも変えることができる。そして彼らを霊的に助けてくれる。それが神聖な魂の降臨が本当に必要である理由ではないかと思う。」などのコメントの共有がありました。

また、『ラーマカター ラサ ヴァーヒニー』（ババ様の著書、ヴァーヒニーシリーズの一冊）*9に関するRadio Saiオーディオプログラムの一部をご紹介します。

-
- ※1カースト：カーストには、大枠を示す四氏姓（ブラフミン、クシャトリヤ、ヴァイシャ、シュードラ）で区分するヴァルナと、職業で細かく区分するジャーティがある。各カーストはそれぞれの浄性を保つために、婚姻や職業に関する厳しい規制を設けている。カーストの高低と貧富は必ずしも一致しない。
 - ※2ヴェーダ：神聖な真理の言葉、神の息吹の集成であり、古代インドの聖賢たちによって視覚化された。もとは一つだったものをヴィヤーサ仙がヤジュル ヴェーダ、リグ ヴェーダ、アタルヴァ ヴェーダ、サーマ ヴェーダの四つに編纂した。
 - ※3スワミ：聖者などの尊称、ここではサイ・ババ様のこと。
 - ※4バガヴァッドギーター：インドの大叙事詩『マハーバーラタ』の中の詩。マハーバーラタの戦いの前にマヤーによって戦う意気を失ったアルジュナにクリシュナが説いた御教え。
 - ※5クリシュナ神：ヴィシュヌ神の化身、ドワーパラユガにおける神の化身 純粋な愛の具現。
 - ※6マハーバーラタ：従兄弟の関係にあるパーンダヴァ側とカウラヴァ側の間で行われた十八日間の戦争を背景とした大叙事詩。
 - ※7ダルマ：本分、正しい行い、法、正義、規範、権利、義務、慣習、宗教という意味をもつ。ダル（保つ）を語源とする。
 - ※8プッタパルティ：スワミの生誕地であり本拠地である町の名前。
 - ※9ヴァーヒニー シリーズ：インド発行の月刊誌、サナータナ サーラティ誌にテルグ語と英訳で連載されたサティヤ サイババの著作。
-

2022年4月27日 (水) のオンラインスタディーサークルはプレーマヴァーヒニー第32節、第33節

「永遠なるヴェーダの教えは、全人類の遺産である」、「パーラタの主流を占める神聖な人々」について37名の参加のもと話し合いました。

サナータナ ダルマ (古来永遠の法) の減退の要因は何か? それを取り戻すための神の帰依者による一歩とはどのようなものか? 第33節には、これまで多くの偉大な支援者たちが生まれてきたにもかかわらず、永遠であるヴェーダ*1 宗教に無限の不名誉が与えられていることが述べられている。なぜこのようなことが起きるのか? 永遠なるヴェーダ宗教に栄光をもたらすためには何が必要か? 第33節にある「発展は腐敗するのみ」という記述について、どのような見解をもつか? などについて意見交換しました。

参加者の皆さんからは、「私たちサイの帰依者にはスワミ*2 が本当に分かりやすい形で規律、九つの行動規定*3 などを示してくださっている。つい先日、埼玉の記念祭でSis. Aにスピーチをお願いして、サティヤ・サイ・プライマリー・スクール (初等学校) についてのスピーチをいただいた。プライマリー・スクールの先生方は規律のある信愛で子供たちに接しているという話があった。毎日の祈りと瞑想は九つの行動規定の一つ目で、そういうところから最初に初めて、継続していくことが大事と思っている。」、「サナータナ ダルマの本来の部分を見落とす流れができてしまっている。いろいろな文明が発達して表面的な捉え方になってしまった。さらに枝分かれしてしまったり、段々と本来の根本的な要素や知識が薄れてしまい、表面的なところだけで満足する人々が増えてきた。それを取り戻すためにはどうするかと言うと、根本的なところを古代と同じように取り入れていく、そういうやり方だと思う。」、「スワミの御講話の中に、犠牲を払わずして不死を得るチャンスはないとヴェーダは述べているというものがあつた。サイの帰依者は行為そのものに喜びを感じて、愛の有る努力をする。そして結果というのは求めない。結果ではなくて、行為そのものを喜びとする。そして神に仕えるために愛のある行動をするということがサイの帰依者の特徴だと思う。永遠なるヴェーダ宗教に栄光をもたらすためには、犠牲をいとわないと考えなければならないと思う。」、「今の世の中が目に見えるものを重視して、目に見えないものをどんどんないがしろにしていく傾向がある。そういう傾向がヴェーダというものから、どんどん離れていってしまっているということ。姿形ではなく、例えば心であるとか気持ちだとか思いやりなどの本当に目に見えない真理に皆がどれだけ気付いていけるのかということだと思う。」、「真実はそれ自体が完璧なので、発展する必要はなく、発展するというのは時代によって好みが変わっていくということ。」、「皆さんが質問1や2で答えられたこととほとんど同じ。世界の文明がどんどん発達したが、本当に表面的なことだけを快適な生活のために取り込んでしまった。わがままが増えてしまい、人としての余裕がなくなり、欲望が積み重なった。じっくりものを考えるとか内に向かうということがどんどんなくなってきた。ニュースでも悲しいことがたくさんあり、外の世界がどんどん崩壊しており、人間的な精神が崩れているという形で表れていると思う。それが発展は腐敗するという。将来的にはこのことから学んで、スワミの意図のもとで発展していければ良いという希望も祈りとしてもっている。」、「若い頃、ある新興宗教の勧誘をしていた方の話を聞いた。その方はもともと仏教系の創始者の方を非難するようなことを言っていた。やはり利己心に染まっている心の狭い方というのは、間違っただけを真理に加えてしまう。枝分かれして間違っただけの道に至っているのかなと思った。スワミがよく真理は一つ、賢者はそれを様々な名前で呼ぶとおっしゃっている。様々な名前で呼んでもやはり真理は一つ。そして違う名前であってもそれを非難してはいけないと思う。利己心やエゴに染まっている方は盲目になって違った方向に向かって進んで、そこで発展していこうという道に進んでいるがゆえに、それが腐敗に向かって進んでしまっていると思った。」などのコメントの共有がありました。

サイの学生の皆さんからは、「サナータナ ダルマという言葉自体は永遠のダルマという意味で、それは創造者によって敷いていただいた道。私たち個人個人がサナータナ ダルマにちゃんと適応しなければならない。サナータナ ダルマは永遠のものなので私たちの手で勝手に薄めたりさえもできないようになっている。本当のサナータナ ダルマは決して薄まったりすることがないが、ただ私たちの理解が薄まってしまうことだと思う。私たち個人はそのサナータナ ダルマに心をしっかりとフォーカスしていくことができる。見るものに様々な違いがあっても、絶えず神に全託していかなければならないということだと思う。そして何かの奉仕に従事することだったり、神聖な御名を唱えることだったり、ダルマにしっかりとつかまれていることが助けてくれると思う。自分よりも若い世代に教えるためにバガヴァッドギーター*4 を読んだりすることが必要だと思う。サナータナ ダルマにしっかりとフォーカスしていくならば、何の罰もない。私たちが交通ルールを理解して、その上でしっかりと車を運転するのであれば、他に誰も導いてくれなくても大丈夫。そのようにサナータナ ダルマは私たちが喜びに満ちて生きたり、私たちが能力の限り生きていくのを助けてくれる。」、「パルティ (プッタパルティ) *5 で最初に教育を受けた時に、ある先生がダルマの話をした。ダルマがそんなに複雑だと考える必要は全然ないと教わった。普通の人間は3つの基本的なポイントで理解することができる。人生でどのような野望・目標をもっているのか? どうしてそういうことを目指すのか? という事。そして、実際にそれを達成するためにどういった手法を取る必要があるのかということ。もし人がその3つのことを明確に考えるのなら、自分なりの確信を得ているのなら、自分のダルマの道歩いていける人だと思う。先ほどのお話にもあつたが、サナータナとは永遠という意味。いついかなる時にもそれに従えば良いという知識が得られる。どうして薄まったかということに関して、本来願うべきものからずれたものを願っている。生まれた時から人間というものは何かしらの責任をもってそこにいる。それは両親に対する義務だったり、兄弟、親戚、あるいは社会に対する義務だったりする。サナータナ ダルマでは、そういった人々に対する自分の責任義務を果たしていきたいと願うことが目的であるべきだと言っている。私たちの責任が果たされないのであれば、当然のことながら社会が混乱に陥いる。サイの帰依者として、いろいろな願いとともにいろいろな責任を果たしていくようにしなければならない。家族とか社会の責任を果せるように御教えに従い、そういった

責任をしっかりと行うこと。スワミもこれまでたくさんの御講話をされてきて、その中でバガヴァットギーターや叙事詩の深みを教えてくださっている。私たちの義務を果たすことを助けてくれるようになっていく。私たちが義務を果たしていけるようにと、それが私たちの願いであるようにということ。」「ここでスワミが何回も述べていらっしゃるように、本当は永遠のヴェーダの宗教に非常に不名誉が与えられてしまっている。同時にインドでも世界でも、ダルマ的な生き方を改善しようと努めている多くの方々がいらっしゃる。また、いろいろな文献ではヴェーダに強く従ってきた人々の直接の子供が大変良くない振る舞いをした例さえもよく出てくる。例えばブラフマー（創造を司る神）の子孫はラーヴァナ※6だった。同時にダルマについて良く知る非常に多くの人々もいる。しかし、よく知っていることが、必ずしもダルマ的な人々であるということにはならない。サンスクリット語でのダルマの意味は、従われるものという意味。だから、もしそうであるのであれば、ダルマには従わなければならない。単にダルマを知っているだけでは、確かに知識にあふれた人にはなるかもしれないが、必ずしもダルマ的になるというわけではない。本当の大事な基本的な原則は、スワミが言われたように、そのダルマに従うということ。スタディーサークルでは、いろいろなことをたくさん話し合うが、どうやってダルマ的であることができるのかを話し合う小さな機会になっている。ここに参加したり話したりするだけでダルマ的になるわけではなく、本当にスワミがおっしゃった生き方ができるのであれば、それを通してダルマ的になることができると思う。最も基盤的な原理に従っていくことが真にダルマ的であるために非常に必要だと思う。そして、永遠の宗教に栄光を与えることは、それは私たちがやらなければならない義務というものではもはやないと思う。私たちの唯一の義務はダルマに従うこと、ただそれだけだと思う。ダルマが減衰した時にはクリシュナ神※7のようなアヴァター（神の化身）が来て、ダルマを掲げてくださる。それは本当にアヴァターのダルマで、失墜したように見えるものを取り戻して掲げることは、本当にアヴァターのダルマだと思う。」「サナータナ ダルマというのは、正に生き方ということだと思う。それを一種の宗教として見なすことは適切ではないと思う。どういう生活様式で生きていくかという指針のようなものだと思う。今日の人々が不名誉に陥っているのは、やはり一時的な喜びを追い求めてしまっているからだとスワミはおっしゃっていて、あまり良い生活の仕方にはなっていない。なぜそうになってしまうのかということに関してスワミがおっしゃっているのは、罪への恐れがないことと、神への恐れがないから。人々は他者の意見をちゃんと聴かなくなっている。そして人々もどんどん利己的になっていて、自分自身のポイントだけから見るようになってきている。そして社会に不調和が起きている。そうすると人々が真の幸福を楽しむことができなくなってくる。私たちは皆、人生における第一の目的は、幸せになることだと思っている。しかし、良くない行いが原因で、そのような幸福を得ることができていない。そして社会というものに不名誉を与えてしまっている。」「スワミが美しくおっしゃったのは、発展して成長していくということは最後には衰えることにつながるを得ないとおっしゃっている。バーラタ（インドの正式な国名）では大人になってそれぞれがいろいろな道を歩むようになるが、それぞれが純粋な思いをもって歩んでいかなければならないとおっしゃっている。日々自己コントロールしながら歩んでいかなければならない。人生の早い段階では、いろいろな文献や経典、シャーストラ（法典）、ウパニシャッド※8、ヴェーダなどと歩んでいかなければならない。そして私たちは自分の国の中のあらゆる階層を助けていくように努める必要がある。そういった道が現代社会のシナリオでは従われていない。むしろ人々はそれよりも力を信じたり、より利己的になってそういった道に従っていない。また、自分たちの兄弟姉妹に対しても嫉妬を抱いたりする。そういったことのすべてが良くない特質につながっていく。そして心に平安がないことにつながっていく。成長してもやがて減衰するという言葉があるが、そういったことがないようにセルフコントロールをしっかりする必要がある。そしてサナータナ ダルマが従われることがないと、人々が墮落して非常に悪い特質に陥ってしまうということを言っている部分だと思う。これらのすべてがどうして起こってしまうかというと、神がそこにいるという恐れがないことによる。私たちににとって必要な責任というのは、若い世代にサナータナ ダルマを取り入れていくこと。そういったバックグラウンドで育った人々が大人になれば他者を愛することができて利己心がなくなっているだろうと思う。」などのコメントの共有がありました。

動画紹介では、先日のアーラーダナ・マホーツァヴァム※9におけるSSSMCサットサング「サイはどこにいるのか？」より一部をご紹介します。

※1 ヴェーダ：神聖な真理の言葉、神の息吹の集成であり、古代インドの聖賢たちによって視覚化された。もとは一つだったものをヴィヤーサ仙がヤジュル ヴェーダ、リグ ヴェーダ、アタルヴァ ヴェーダ、サーマ ヴェーダの四つに編纂した。

※2 スワミ：聖者などの尊称、ここではサイ・ババ様のこと。

※3 九つの行動規定：ババが定めた帰依者のための行動規定。

※4 バガヴァットギーター：インドの大叙事詩『マハーバーラタ』の中の詩。マハーバーラタの戦いの前にマラーヤによって戦う意気を失ったアルジュナにクリシュナが説いた御教え。

※5 プッタパルティ：スワミの生誕地であり本拠地である町の名前。

※6 ラーヴァナ：『ラーマヤナ』に出てくるランカーの羅刹（悪鬼）の王。

※7 クリシュナ神：ヴィシュヌ神の化身、ドワーパラユガにおける神の化身 純粋な愛の具現。

※8 ウパニシャッド：ヴェーダ聖典群の中の哲学的部門の総称で、ブラフマンの探求を主な主題としている。

※9 アーラーダナ・マホーツァヴァム：ババに感謝を捧げる「感謝大祭」。2011年4月24日（日）日本時間11時10分に肉体を離れたババに感謝を捧げる日。マハーサマーディの日とも呼ばれる。

2022年5月5日(金)のオンラインスタディーサークルはプレマヴァーヒニー第58節「真理の発見に専念し、永遠なるものを熟考しなさい」について34名の参加のもと話し合いました。

「永遠に存続し、永遠に真実である神を熟考し、真理を見出すことにすべての時間を捧げなさい」との御言葉に関して、日常生活でどう実践するか? 「いかなる迷妄の中に投げ込まれようとも、真理はよりまばゆく輝くばかり」であることを、どのように実感できるか? 「このかりそめの世界においては、真の生き方はあり得ません」との御言葉に関して、かりそめの世界をどのように活用して神を悟るべきか? などについて意見交換しました。

参加者の皆さんからは、「スワミ*1が教えている朝の祈りで、『今日一日すべての行いを神への捧げものとして行います』という祈りがある。この祈りを始めた時に、最初朝の祈りができなかった。とてもではないが、良いことも悪いこともするので、一日を神への捧げものとしなすとはなかなか言えなかった。最初は一日終わった後に捧げることはできるだろうと思い、夜の祈りから初めた。その後、せめて一日を神聖で煌めくものにしたい、朝も祈るうと思ひ、もう一回朝の祈りを見てみると、そのように書いてあり、だんだん祈りと一致してきた。祈りは非常に重要だと思った。」「すべての時間を捧げることができたら最高に良いと思う。この世に生きているといろいろな誘惑があって、すべてを捧げるには難しい部分がある。私の場合はなるべくスワミの写真を部屋に飾ったり、スワミの御言葉を飾ったり、スワミを忘れないようにしている。(中略) SSIOJで打ち出されていた、朝・昼・晩の時間を意識して、一日3回というのを自分の中で決めてやると、以前は本当に朝のみ、夜のみになってしまうことが多かったが。一日3回やるようになってから、かなり自分の中で捧げるものが増えてきたと思う。」「今までで自分の執着とかエゴで苦しみや悲しみが一杯になってしまった時でも、空を見て『美しき』と心が動くというか、この美しい空を見られるだけでもう一日頑張ろうと思えたり、自然を神々しいと思ったり、道端の花が美しいと思えたり、赤ちゃんが本当に愛しいと思ったり、歳をとっている人に席を譲る姿を見て『ああ、なんて素敵なことだろう』ということに触れると、何かほっとする。そのように気持ちが動くのは、自分の中に光のような、そういうものが存在しているのだと思った。」「外側の事象に対して反応しても、そこに引っ張られて苦しみが大きくなり、やはり自分の内側に向かって、その至福を体験していく方が自分にとっては本当に大切。常に神を黙想していくことで実感していけると思う。」「私はスワミのことを知る前から『人事を尽くして天命を待つ』という言葉が非常に好きで、仕事や勉強などいろいろなところで目標を立てて、『人事を尽くして天命を待つ』という言葉自分を言い聞かせながらやってきたところがある。仕事の目標にしても勉強の目標にしても、本当は意味のないことなのかもしれないが、目標を立てて一生懸命やる中で自分自身が成長できるし、その中で瞬間的に真理を見るということもあった。そのように、かりそめの世界を活用しながら自分を成長させていくことができるのではないかと思う。」「スワミはいつも私は至福ですとおっしゃっていたので、私たちも自分の中のアートマ(神我)の部分が光り輝くと、どんどん幸福で幸せになって、私というエゴが減るとどんどん幸せになっていくのかなと思う。そしてスワミが言われている、『人生はゲームです。楽しみなさい。人生は挑戦です。立ち向かいなさい。人生は愛です。分かち合いなさい。人生は夢です。実現しなさい』という言葉も教えてもらっているのだから、少しずつそのように生きていけたら良いと思っている。」などのコメントの共有がありました。

サイの学生の皆さんからは、「一つ大事なことは朝起きてから夜寝るまで常にスワミに照らして正しいことを考え続けるということかと思う。その一日にあたってダルマ(正義)、平安、愛、非暴力に関して従ってきたのかどうか考えることが必要と思う。スワミがおっしゃっているどの御言葉でもどの引用でも良いが、決めたことを一つ、一日しっかりと従う努力をしていくことが必要と思う。一つひとつのスワミの御言葉の引用を実践するには大変な努力を要する。プッタパルティ*2で刊行しているダイアリーがあるが、そのようなものに示されている御言葉をその日の終わりに至るまでしっかりと沿うようにできたかどうか検証していくことが大事。そういったことを毎日行っていると人生の真の目的を気づくことになると思う。特に先ほどの御言葉の『永遠に真実の神を熟考する』ということと関連したことは、私たちが毎日過ごすことにおいて道を逸れて時間を無駄にしないことが大事だと思う。時間を無駄にしてしまうと、神様が私たちが最も進化した種と与えてくださったという意に沿わないことになってしまう。この世のすべての人間に魂の目的があり、それは神にかなった人生の目的だと思う。時が経つと共に人間には世俗的な執着が生じていく。世俗的なことに執着しないように心掛けながら、正しいことにフォーカスできるようにしたい。自分は神であるということに、一人ひとりの心の中で常にフォーカスしていかなければいけない。いつも私たちが神だと考え続けていくのなら、神が私にどうして欲しいのだろうか考えることになると思う。」「最初に理解しなければいけないことは、やはり物質的なことは幻影であるということ。物質的なことは絶えず移ろい行く。今日はお金があるかもしれないが、明日にはもうお金は無いかもしれない。移ろい行くものに執着してしまうと決して幸せにはなることができない。そういったことを常に黙想することによって、物質的なことは移ろい行くことを知り、より真実の方にシフトして行く必要がある。そして私たちの中に流れているエネルギーは同じものであるという真理を実感する必要がある。そして、私たちは繋がっていることを知らなければならない。真実というものの性質を理解するためには、そのような霊性の基本的な側面をまず理解しなければならず、そうして初めて、その道をしっかりと歩き始めることができるだろうと思う。」「シュリーマド・バガヴァータム*3に書いてあるが、例えば貧しさも大変な祝福であるということ。自分が貧しいのであれば、他の人にそれが起こったときに、それがどういうことなのかを知ることができるから祝福であるのだと書いてある。実際に本当に貧しい道を生きている人にとっては、余りにも苦しみが大きくて、それによってダルマの道からも外れてしまう程の苦しさがそこにある。そのように、貧しくない人が貧しさについて見る時と、本当に貧しい人が貧しさに接しているときとは、本当に見え方がまったく違う。色々な文献の中には羅刹、鬼、悪魔などがたくさん生まれてきて、『お前を殺すぞ!』などと言っている。でも、そういったところにこそ生まれて愛を届けようとする魂もいる。この世の中というものは、すべてのそういった構成員たちによって成り立っている。

実際にその中で、どう振る舞うかは、そこに含まれている登場人物によって振る舞いが違って来る。暗闇というものは、過去にも今にも常に存在しているが、過去にも今にも、暗闇もあれば、そこを灯すキャンドル、灯との両方が常に存在している。暗闇があれば、それを照らすキャンドルが常に存在しているので、私たちがそのキャンドルを灯す側になれるように努めていかなければならない。ヴェーダ*4などの真の伝統というものは、そこに暗闇がやってきても決して変わったりするものではない。ヴェーダの伝統に従うことができれば、すべての暗闇、悲しみ、そういったものはすべてどこかに行ってしまう。そういう種類の光であると思う。毎朝太陽が昇れば、夜はどこかに行ってしまう。世界では、太陽が昇る時間と、夜の暗闇の時間が繰り返されているが、私たちは夜の時間を眠って休み、日が昇ればその時間を楽しむように、その両方の時を楽しんで生きていくことができると思う。そして調和という価値や平安という価値に従って、その中で生きていくことができると思う。」「自己実現だけがこの世界の唯一の真実。自己実現ということは自分自身の潜在力を実現すること。そのために私たちができる唯一のことはハードワークだと思う。なぜなら、私たちの完全な潜在性がどのようなものなのかを知るのには、ハードワークによってであると思う。この世の中をどう活用できるかという、ハードワークによって一刻も早くそれを悟ることだと思ふ。単純に言えば、価値に従って生き、悟る時までハードワークを続けること。それだけが唯一の真実でゴール。そしてゴールはまわりのすべてのごみを捨て去ることによって得られる。ハードワークにより、私たちの潜在性の周りにあるすべての幻影を捨てることによってそれを得ることができるだろうと思う。」「例えば自己実現という言葉は、靈的なバックグラウンドをもたない人がこの言葉を聞くと、自分の最大限の潜在力を実現することという意味になると思う。それを実現するためには人生全体の中でどんな準備をしなければならないのかを知る必要がある。(中略)様々な要素がある中で自己実現を得なければならないというポイントにフォーカスする必要がある。宗教の種類によって何が自己実現であるのか違った見方がされている。そういったところへと超越していくためには心や身体をいつも神につなげていく必要がある。神とのつながりが本当に恒久的な永遠の道。そのつながりは個々の身体や心に限定されたものではない。そのような道がどのように作られたかという、神なる精霊によって作られたと思う。もう一つは、私自身は誰だろうかというポイントがある。そこで気づかなければならないことは、私たちの感情や思いは本当の思いではなく、肉体から発しているということ。このような思いは毎日変化していく。そういったことで感情的なことに重きを置く必要はなく、『私とは誰か』という問いがより重要。これに従うためには、今現在を生きる必要がある。ガジェットを触っていたり、友人にフォーカスしてはそれようにはなれない。一日の中で私たちは『今』に本当に短い時間しかフォーカスしていない。私たちはもっとそこに飛び込んで集中力を示し、神と融合するためにその時間を見出して、そういう努力をしていかなければならないだろうと思う。そういう自我意識が比較的少ないタイプの人は簡単にそこから抜け出すすべを見出すと思う。それを始めるためには、私たちは毎日瞑想することを始めるべき。そして毎日自己実現を果たすために時間を割いていくことが必要。自己実現は一夜のうちにやってくることはないの、時間と実践が必要。その実践を続けていけばそれが習慣になると思う。私たちが自分の人生を自分でコントロールするという感覚を得て、自分の人生は他の誰かがコントロールしているわけではなく、自分でコントロールしているのだという実感が得られるようになったとき、最終的なゴールにたどり着けるのではないかと思う。」などのコメントの共有がありました。

*スワミ：聖者などの尊称、ここではサイ・ババ様のこと。

*プッタパルティ：スワミの生誕地であり本拠地である町の名前。

*シュリーマド・バガヴァータム：神（バガヴァット）のもの、神から来たもの、ヴィシュヌ神やクリシュナ神と関係する、神聖な、聖なる2）聖賢ヴィヤーサの著で、バガヴァットという名で呼ばれるヴィシュヌ神とその化身の物語集。神の本の意。

*ヴェーダ：神聖な真理の言葉、神の息吹の集成であり、古代インドの聖賢たちによって視覚化された。もとは一つだったものをヴィヤーサ仙がヤジュル ヴェーダ、リグ ヴェーダ、アタルヴァ ヴェーダ、サーマ ヴェーダの四つに編纂した。